三鷹市山本有三記念館館報

Yuzo Yamamoto Memorial Museum Report

第 29 号
2024年9月

山本有三　没後50年

「濁流」雑談 近衛文麿」――燃ゆる創作への想い――

会期：令和6年9月14日(土)～令和7年5月11日(日)

令和6（2024）年は、山本有三［1887―1974］の没後50年、また、その死によって未完の絶筆となった「濁流 雑談 近衛文麿」（以下、「濁流」）が書籍として刊行されてから50年目という、節目の年にあたります。

戦後の有三は、昭和24（1949）年に小説「無事の人」を発表して以降、新たな作品を世に問うことはなく、理想郷と称した湯河原の邸宅で読書に没頭しました。大化の改新をはじめとする古代史や石川丈山*、幕末など、自らが興味を惹かれた事柄について、心の赴くままに研究を重ねる日々を過ごしましたが、二十年以上にわたる沈黙の期間を経て、新作「濁流」の連載に踏み切ります。昭和48年、85歳という老齢に至ってのことでした。

「濁流」は、有三と第一高等学校の同級生であった政治家、近衛文麿「1891―1945」を題材とした作品です。文麿は、昭和12年から16年にかけて三度にわたり首相を務め、大政翼賛会の設立や三国同盟の締結に携わりましたが、戦後、戦犯指定を受け、逮捕直前に荻窪の自宅で自死しています。

有三とは、一高卒業後、進路は異なりながらも、座談会や対談などで折に触れて顔を合わせた間柄で、首相就任以降、いくつかの声明文の作成が有三に依頼されていたことがわかっています。

特に、昭和16年から文麿が亡くなるまでの約四年間の二人の親交は極めて深く、昭和19年には、文麿から有三に伝記の執筆が依頼されています。

有三は近衛邸に出入りし、幾度か取材を行いましたが、文麿の多忙さから聞き取りは容易に進まず、さらに文麿が自死した後は健康上の理由から、伝記の執筆を手放すことになりました。しかし、調査そのものを中断することはなく、長い年月をかけて、文麿や近衛家に関する膨大な資料にあたり続けました。

文麿の死から二十年以上を経た「濁流」の発表について、「毎日新聞」に掲載された予告記事には次のように記載されています。

近衛についての著作は、すでに少なからずあらわされており、山本氏としては自分だけしか知らない話を公けにすべきかどうか迷ってきました。しかし自分が書かなければ、この事実は永久に日の目をみなくなるとする義務感と使命感から、あえてみずから関係した範囲内での実録として世に問うものでもあります。（「毎日新聞」昭和48年3月27日）

長年の調査を作品として世に出すにあたり、有三は、伝記ではなく「雑談」という形式を選択しています。事実を時系列そのままに描くのではなく、作家本人がインタビューを受け、思い出すまま語るかのような手法を採ることによって、作品には記録文学の枠組みを超えた一種の味わい深い間が生まれ、複雑な昭和史の中に、近衛文麿の人間としての一面を浮かび上がらせる効果を生んでいます。有三の熟練した筆力（ひつりき）がいかんなく発揮され、完成していれば作家畢生（ひっせい）の大作となったことを予感させます。

本展では、有三と文麿との親交を示す書簡や、文麿自筆の書、作品の構想メモとみられる書込みの入った創作ノート等の資料を手引きとして、「濁流」の作品内容をご紹介します。

没後50年を機に、山本有三が最期に書き残そうとした大作「濁流」の構想に想いを馳せていただければ幸いです。

山本有三と近衛文麿（昭和14年8月　軽井沢の近衛別邸にて）

*石川丈山［1583―1672］…安土桃山時代から江戸時代初期にかけて活躍した武将・文人。京都の詩仙堂を造営したことで知られる。

（文芸企画員・学芸員　三浦穂高）

コラム　毎日新聞記者・松岡英夫のまぼろしのインタビュー

コンパクトカセット
「松岡英夫氏と対談（第1、第2）」
（昭和45年11月18日）

昭和45年、山本有三は、あるインタビューの依頼を受けます。それは、「毎日新聞」の記者、松岡英夫が受け持っていた人気連載記事「この人と」（昭和44年4月1日～50年4月19日）に掲載するためのインタビューでした。記念館では、松岡から有三へのインタビューを収めたカセットテープを所蔵しています。テーマは近衛文麿についてで、有三は聞き手の松岡に、一高時代は文麿とさほど近しくはなかったこと、最も親しかったのは文麿が亡くなるまでの4年ほどであったことなどを語っています。

結局、この時の談話が記事にされることはありませんでしたが、その3年後、有三は「濁流 雑談 近衛文麿」を同紙に連載しています。松岡のインタビューに応える形で文麿について語ったことが、作品を「雑談」という形式で執筆するきっかけとなったのではないかとも考えられます。

事業報告

1月　第9回 スケッチコンテスト

三鷹市公会堂さんさん館にて毎年開催しているスケッチコンテストには、今回も幅広い年齢層の皆様からご応募をいただきました。来場者の投票と審査員の推薦により、今年度から新設の「みらい賞」を含む5作品が受賞に輝きました。

5月　第15回 春の朗読コンサート

今回のコンサートには、朗読家の野田香苗さんとヴィオラ・ダ・ガンバ奏者の藍原ゆきさんにご出演いただきました。野田さんには、有三の代表作『新編 路傍の石』から、「たった一度しかない一生を…」の言葉が印象的な「吾一（三）」の章をはじめとする朗読を、藍原さんには、A・フォルクレ『ヴィオルと通奏低音のための曲集』より「ラボルド氏のアルマンド」、「ブレイユ氏」、「ルクレール氏」といった曲目をご披露いただきました。

第10回 三鷹市山本有三記念館スケッチコンテスト作品募集

四季折々の姿を見せる山本有三記念館をあなただけのタッチで描いてみませんか。コンテスト終了後、受賞作品は山本有三記念館で展示します。

有三記念公園は入場無料です。お気軽にスケッチにお越しください！

募 集 期 間：令和6年10月1日（火）～12月15日（日）必着
コ ン テ ス ト：令和7年1月18日（土）～26日（日）　会場：三鷹市公会堂さんさん館2階展示室
受賞作品展示：令和7年2月4日（火）～3月9日（日）　会場：三鷹市山本有三記念館

※応募詳細につきましては、当記念館までお問合せいただくか、ホームページをご覧ください。

ガイドボランティア　土・日・祝日の午後1時から4時まで解説を行っています。
事前申込は不要ですので、お気軽に声をおかけください。

編集・発行
三鷹市山本有三記念館
〒181-0013 東京都三鷹市下連雀 2-12-27
TEL：0422-42-6233
URL：https://mitaka-sportsandculture.or.jp/yuzo/
過去の館報を公開しています。　@BungeiMitaka

開館時間：午前9時30分～午後5時
休 館 日：月曜日及び年末年始（12/29～1/4）
月曜日が祝日の場合は開館し、翌日と翌々日を休館
入 館 料：300円（20名以上の団体 200円）　年間パスポート 1,000円
●中学生以下、障害者手帳持参の方とその介助者、校外学習の高校生以下と引率教諭、「東京・ミュージアムぐるっとパス」利用者は無料
アクセス：JR中央線「三鷹駅」南口より徒歩12分、
JR中央線・京王井の頭線「吉祥寺駅」南口（公園口）より徒歩20分
三鷹駅南口よりみたかシティバス「むらさき橋」下車徒歩2分
吉祥寺駅南口より小田急バス「万助橋」下車徒歩5分

「濁流 雑談 近衛文麿」特別インタビュー

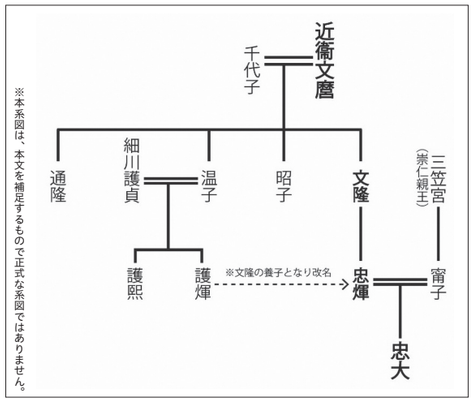
近衛忠大氏に聞く

――語られない近衛文麿像を問い直す

――忠大さんは、近衛文麿直系の曾孫にあたられていますが、どういったつながりかをおうかがいできますか？

文麿には二男二女の計四人の子どもがいました。長男の文隆はシベリア抑留中に亡くなってしまい、次男の通隆には、子どもがいなかったものですから、細川護貞に嫁いだ長女・温子（よしこ）の次男である護煇（もりてる）（のち、忠煇と改名）、すなわち私の父が近衛家に養子に入ったという次第です。文隆が戦争で亡くなっていなければ、おそらく私も細川姓のままだったと思います。

護貞と文隆は幼なじみでした。戦中には二人とも文麿の秘書官をつとめており、本当に仲が良かったようです。後に護貞は文隆の妹と結婚をし、本当の兄弟になっています。残念ながら、細川家に嫁いだ温子は、私の父である護煇を生んで一年ほどで亡くなってしまいます。父は母親のことを全然覚えていないですし、家族としての近衛家というイメージは、あまりなかったのではないかと思います。私自身、『近衛家の太平洋戦争』（NHK出版　平成16年）を執筆したきっかけは、家族としての近衛家を自分で知りたかったということがあります。戦争による大きな断絶のために、近衛家については本で読んで知ってはいるけれど、イメージは全然できませんでした。取材によって、いわば点と点をつなぐような体験ができたのは非常にラッキーでした。



――忠大さんは外国生活が長く、どちらかと言うと細川家の家風でお育ちになったとのことですが、ご自身が近衛家の一員であるということを意識するのは、どういう時でしたか？

そうですね…。海外で育つと、苗字なんて関係なく、そんなことは全く知らずに育ちましたが、日本に帰ってきた瞬間に、やいのやいの言われるわけです。特に大人に。それで自然に身の回りにある近衛家関係の本とかをパラパラめくるうちに、「なるほどな」と…。とはいえ、やはり遠い存在というか、教科書を読んでいるような感覚ですけれど。

それが、初めて陽明文庫*1へ行き、祖父・文隆の書を見たときに、急につながっているんだ、ということを感じたというか…。時代的にも遠いと思っていたことがつい最近のことで、なのにそこから先がつながっていないということがとても不思議で、そこをつなげてみたいなと思いました。

家族の中で、改まって近衛家であるということについて話があるわけではなかったです。母が皇室出身なので、むしろ、母から聞く「皇室と近衛家の関係」という視点の影響のほうが大きかったかもしれないですね。

――山本有三についてはご存じでしたでしょうか？

「濁流 雑談 近衛文麿」（以下、「濁流」）の存在はもちろん知っていましたし、一高時代に交流があったというところまでは把握していました。NHKの取材の折に、文麿に関するものは片っ端から読んでみようと思い、そのときに読んでいます。ですが、口語体の雑談形式ですし、比較的さわりの部分だけで終わっていたので、残念ながら史実としては、当時の私にはあまり参考にはならなかったですね。

今読んでみると、山本有三さん自身が見てきた（昭和史の）色々な流れと、文麿本人を知っていて感じることのなかで、どういうふうに描こうか、物凄く悩んでいるのを読み解けるのがとてもおもしろいなと思いました。

――たしかに、文麿の歴史的な評価と、自分が知っている文麿像の間をどう埋めるかというのが、「濁流」の一つのテーマで、そこのところが他の歴史書とは違うところなのではないかと思います。

最終的にどのように書かれたか、というのは本当に知りたかった。

――どういう作品になっただろうとお考えですか？

（世間の）かなり多くの文麿像が、性格が弱いというか、決断力がないと断罪していますけれども、そんなんじゃないと思うんですね。私はかなり強い人だと思っています。ストレートに（自分の考えを）言うことなく、全体を物凄く大きなところから見て、判断していく。常人には中々わかりにくいパーソナリティだったとは思います。そのことを（有三は）非常によくわかっているというか…かなり細かく（文麿の性格を）分析していますよね。その方向性でいくと、全然違った文麿像を書いていただけたんじゃないかなと…。

作中には、政治は結果がすべてということも書かれていて、その通り、結果論としては、文麿は戦争を止めることができなかったですけれども…そもそも、政府自体が何もコントロールできていない中で起きたことなので…。（文麿は）ある意味、その時代に起きた闇の部分を全部引き受けてしまった。それを、決断ができる、できないで評価してほしくないな、という個人的な思いはあります。

文麿には、学生時代に発禁処分となっている書物*2があったりもします。これからの日本をどのようにしていくべきか、というかなり具体的な思いがあった。また、たくさんの頭脳（ブレーン）を周りに置き、物凄く大きな俯瞰からものを見ようとしていた。ふわふわした人にそういうことができるとは思えません。

一方で、政治に関して言うと、「インプリメンテーション」…発想したものを最終的に落とし込むテクニックを持っていたかと言うと、それは…（文麿は）根っからの政治家ではないので…。

とにかく、歴代の（首相の）なかでも非常に視野の広い人物であったのは確かだったと思うんです。明治・大正・昭和という時代の転換期を俯瞰で見ており、留学経験はないですが、パリ講和会議に同行した経験もあります。錚々たる人物に囲まれていたと思いますし、自ら京大に行ったり*3…当時としては珍しいタイプの知識人だったと思います。

――今、お話いただいたような歴史的な文麿像の一方で、「濁流」のなかには、娘や娘の友達の遊び相手としてお馬さんになってあげたというような人間味の溢れるエピソードも書かれています。ご家族にとって文麿は、どういう人物だったのでしょうか？

父の唯一の記憶で、文麿と軽井沢に行く際、碓氷峠のうねうねした道を車で走っているうちに酔ってしまって、文麿のシルクハットに吐いてしまったというエピソードがあります。それを、どこかの池でちゃぷちゃぷ洗っていた後姿をよく覚えているという…（笑）すごい絵ですよね。

曾祖父も祖父も、あまり神経質ではなく、おおらかで優しかったのではないかと思います。

――忠大さんは、過去の取材を通して、ご家族の記憶のなかの文麿像と歴史的な記録のなかの文麿像という二つの面を追われています。忠大さんから見て、文麿はどのような人物であったと思いますか？

政治家として、その時代を生きた人間としての文麿について言うと、タイミングの悪いときに全部を引き受けてしまった人という印象があります。あの局面で、文麿が何をどうしたとしても結果はあまり違わなかったと思います。文麿は、基本的には最初から戦争するのはナンセンスという考えを持ち、始まってからは、和平と戦後のことをひたすら考えるというスタンスを変えていません。私自身は極めてシンプルに、平和主義だったのではないかと思います。ただ正直、一国の首相というタイプではなかったと思います。いわゆるリーダータイプではなくて、究極のオブザーバーとして機能するはずだったのが、はからずも首相となってしまった…。

――文麿が亡くなって30年近く経って「濁流」が書かれ、今、さらに50年の時が経過しています。現在の我々が時代を超えて近衛文麿という人物を知る意義はどのようなものがあると思いますか？

今、文麿に着眼点を置くとすれば、本当の意味での戦争に至るまでの過程を再認識するという意味ではいい機会なのかと思います。

戦前の空気感や雰囲気というものは、現在の我々には想像できません。その時代を生きた人たちにしかわからないものがあります。ところが、戦後の教育のなかでは（太平洋戦史は）一切、掘り下げられることがなく、なんとなくという空気感で語られています。近衛文麿というとネガティブなイメージしかない。

しかし、明らかに戦後の教育のなかで触れられていないことが多いので、それを改めて認識するのは大事なことなのかな、と。さらにそれが、海外の中で戦争がどうはじまったのかという文脈と、日本の我々がなんとなく知っている文脈とが、どれくらいずれているのかを認識することにつながっていくといいのかなと思います。

――ありがとうございました。

*1 文麿によって昭和13年に設立された近衛家伝襲の歴史資料保存施設

*2 文麿翻訳のオスカー・ワイルド「The Soul of Man Under Socialism」（「社会主義下の人間の魂」）が掲載された第三次「新思潮」（大正3年5月）を指す。

*3 文麿は第一高等学校を卒業後、大正元年9月に東京帝国大学哲学科に入学したが、わずか一カ月後に自らの意志で京都帝国大学法科に転学した。

近衛（このえ）　忠大（ただひろ）

昭和45年、東京都生まれ。公家であり五摂家筆頭・近衛家の長男として生まれる。現在はクリエイティブディレクターとして活動するかたわら、特定非営利活動法人七五の理事長、宮内庁式部職宮中歌会始講師や公益財団法人陽明文庫評議員、公益財団法人永青文庫理事を務めるなど、幅広く活躍している。

三鷹市山本有三記念館にて　令和6年5月撮影